

研究区分	教員特別研究推進 地域振興
------	---------------

研究テーマ	慢性腎臓病（CKD）の診断基準となる eGFR シスタチンおよび eGFR クレアチニンの有用性に関する臨床的意義の検討				
研究組織	代表者	所属・職名	看護学部・教授	氏名	荒井 孝子
	研究分担者	所属・職名	経営情報学部・教授	氏名	東野 定律
		所属・職名	国際医療福祉大学・教授	氏名	天野 隆弘
		所属・職名	国際医療福祉大学・教授	氏名	武田 英孝
		所属・職名	国際医療福祉大学・教授	氏名	池田 俊也
	発表者	所属・職名	看護学部・教授	氏名	荒井 孝子

講演題目	人間ドックデータで検討したeGFRcreとeGFRcysの乖離に関する研究
研究の目的、成果及び今後の展望	<p>【目的】 人間ドックデータを用いて、血清クレアチニン値を用いた推算糸球体濾過量（eGFRcre）と血清シスタチンCを用いた推算糸球体濾過量（eGFRcys）の乖離の実際とその特徴について検討した。</p> <p>【方法】 平成30年4月から令和3年3月までの期間にA施設でドック健診を受診したのべ70,446名のうち、シスタチンCのデータがある62,361例を対象とし、eGFRcysのほうが高値になった例について検討した。そのうち欠損値があるデータを除外した60,708例を対象とし、「小さい乖離群」、「平均的な乖離群」、「大きい乖離群」の3群に分類した。eGFRcreとeGFRcysの乖離と各因子（年齢、性別、収縮期血圧、拡張期血圧、空腹時血糖、HbA1c、総コレステロール、LDLコレステロール、HDLコレステロール、中性脂肪、non HDLコレステロール、Cre、Cys、eGFRcre、eGFRcys、尿酸、体脂肪率、尿蛋白、BMI、既往歴の有無）と乖離の関連について調べた。統計解析は、一元配置分散分析による多重比較と、χ^2検定と、重回帰分析を行った。</p> <p>【結果および考察】 eGFR差の分布より、eGFRが60mL/分/m²以下では乖離が小さく、eGFRが60mL/分/m²以上で乖離が大きくなっていった。小さい乖離群から大きい乖離群にかけて女性、若年者（60歳未満）の割合が高くなり、既往歴の有病率は低く、BMI分類は25未満の割合が高く、メタボリックシンドローム判定では該当者の割合が低かった。また、血圧や血液検査データの平均値では3群で全て正常範囲内であったが、大きい乖離群が最も良好な値であった。重回帰分析にて乖離に影響を与える因子を調べたところ、性別が挙げられたが、予測式の精度が悪く統計的に妥当といえる結果ではなかった。以上より、今回の人間ドックデータでは乖離が大きくなる因子は女性であることが示され、乖離が大きい群の特徴として若年者であること、既往歴の有病率が低いこと、検査データが正常であること、やせや標準体型などが示された。BMIおよび体脂肪率による性別、年代別検討について引き続き検討する。</p>